

舟戸遺跡を解明する

2016/04/12～07/03

展示解説パンフレット

【はじめに】

舟戸遺跡は新津丘陵北部周辺の地域を考える上で重要な遺跡です。発掘調査はこれまで 25 回行われていますが、小さい範囲の確認調査が多く、大きな範囲の本発掘調査は少ないです。しかし、小さい範囲の確認調査でも新たに分かることがあります。また、平成 27 年度に行われた本発掘調査からも新しく多くのことが分かりました。

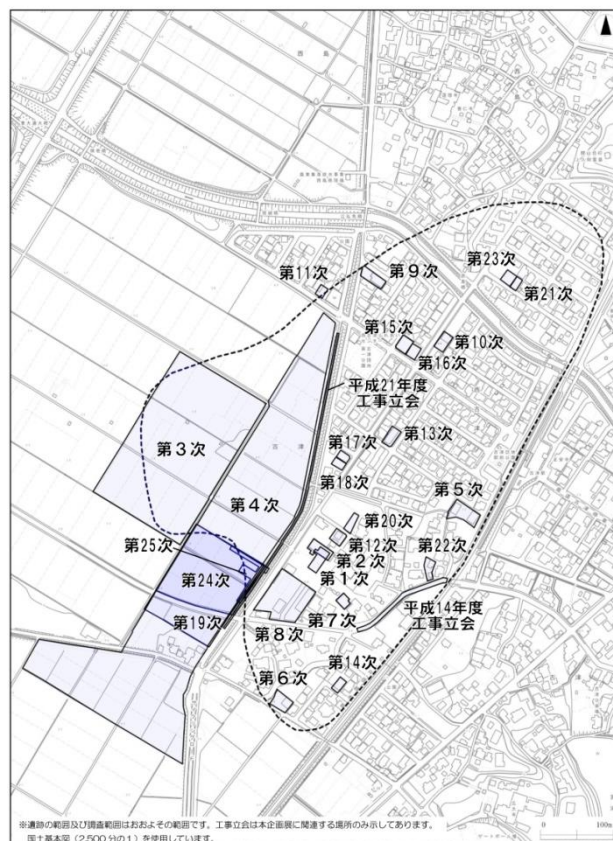
そこで、本企画展ではこれまでの調査から見てきた舟戸遺跡について考えると同時に、周辺の遺跡についてもこれまでの発掘調査の成果を踏まえて、この地域の歴史について触れていきます。

【舟戸遺跡について】

概 要 舟戸遺跡は古津駅のすぐ西側にあります。現在は遺跡の東側が住宅地、西側が水田や畑になっています。遺跡は昭和 20 年代後半の耕地整理によって発見されました。その後、現在まで本発掘調査が 2 回、確認調査が 23 回の合計 25 回にもおよぶ発掘調査が行われています。

また、平成 15 年に現在の舟戸遺跡の西側にあたる北郷遺跡が同じ性格の遺跡として舟戸遺跡と一緒にになりました。

地 形 舟戸遺跡は新津丘陵から流れる金津川と朝日川によって形成された扇状地にあります。そのため、遺跡の東（丘）側が西（平野）側より高くなっています。また、舟戸遺跡の西側の中央付近に、東から西にかけて線状に周辺よりも高い場所があります。第 4 次調査の結果、弥生・古墳時代もこの周辺に線状に高い場所があると考えています。そのため、この場所が当時の川の自然堤防だった可能性があります。そして、弥生・古墳時代には扇状地や自然堤防など周りよりも少し高い土地を中心に生活していたと考えています。



舟戸遺跡の範囲と各調査位置図

【舟戸遺跡の歴史】

縄文時代 平成 27 年度に行った第 25 次調査で、舟戸遺跡では初めて縄文土器が見つかりました。この土器は縄文時代後期に使われていたと考えられます。それまで舟戸遺跡では弥生時代中期以降しか人々が活動していたことが分かっていませんでしたが、新たに縄文時代後期にすでに人々が活動していたことが分かりました。しかし、この調査で見つかった縄文土器は数点で、住居などは見つかっていません。そのため、人々が生活していた集落とは異なり、集落から人々がやってきて一時的に活動した場所だったと考えています。

弥生時代 弥生時代中期から後期の遺物や遺構が見つかりました。特に弥生土器は、北陸や中部高地、東北などの様々な地域の特徴を持つものがあります。また、弥生時代後期の終わり以前



舟戸遺跡第 25 次調査地と古津八幡山古墳

には周りで稲作を行っていたことが自然科学分析によって分かりました。

弥生時代後期には、近くの丘の上に高地性環濠集落である古津八幡山遺跡という大きな集落が営まれます。舟戸遺跡は丘の上で人々が暮らす前からその麓で人々が活動し、その後も丘の上と平野をつなぐ場所だったと言えます。

古墳時代 弥生時代から引き続き、古墳時代の前期から後期にかけて継続して遺物や遺構が見つかります。しかし、前期と後期の遺物は量が少なく、中期の遺物の量が多いです。

平成2年度に行った第2次調査では、中期の集落が確認され、大型の竪穴住居や杭列が見つっています。また、すぐ近くの丘の上には新潟県内最大の古墳である古津八幡山古墳（直径 60m の円墳、前期末から中期初頭）が築かれます。このことから、舟戸遺跡には古墳に葬られた豪族（有力者）が暮らし、豪族の住む豪族居館があった可能性があります。

奈良・平安時代 舟戸遺跡では今のところ飛鳥時代の遺物は見つかっていませんが、奈良・平安時代では土師器や須恵器などを中心に遺物が見つっています。特に遺跡の北東側で行われた第5・23次調査などから、奈良・平安時代の遺物が多く見つっています。

これまでの縄文時代から古墳時代の遺物や遺構が多く見つっていた場所は、舟戸遺跡の範囲でも南西側でした。しかし、奈良・平安時代ではそれまでとは違い舟戸遺跡の範囲の北東側へも人々の生活が広がっていることが分かります。

鎌倉・室町時代 鎌倉・室町時代の土器などが数点見つっています。中世は見つかる遺物の量

が少ない時期のため、数点でも土器などがあることは古代から引き続き中世でも人々が生活していたことを示しています。

江戸時代 舟戸遺跡では江戸時代の遺物も見つっています。そのため、古代から中世、さらに近世へと舟戸遺跡でも連綿と人々が生活を続けていることが分かります。

【舟戸遺跡を解明する】

舟戸遺跡は縄文時代後期から人々が活動している遺跡です。この時代はまだ人々がこの場所で生活をしていたとは考えられません。しかし、丘と平野をつなぐ重要な場所であったと言えます。

その後、縄文時代晩期から弥生時代前期では、今のところ人々の活動の痕跡は途絶えます。しかし、弥生時代中期でも後半になると、再び人々の活動が確認できるようになります。

そして、弥生時代後期になると丘の上に大規模な集落である古津八幡山遺跡が現れます。そのなかで、丘と平野をつなぐ舟戸遺跡はさらに重要な場所であったと考えられます。

舟戸遺跡がある周辺一体は、阿賀野川と信濃川が近くを流れ、東北南部や関東、中部、北陸へとつながる交通の要所です。さらに、当時は河川が重要な交通手段でした。そのような重要な地域だからこそ、弥生時代後期に古津八幡山遺跡あったと考えられ、その麓の川のそばにある舟戸遺跡は交通の重要な場所であったと言えます。

さらに舟戸遺跡は作物を作る場所としても重要な遺跡であったと考えることができます。

弥生時代後期までの地理的に重要な場所であることや食料の生産を行っていたことなどの下地によって、古墳時代になっても舟戸遺跡の重要性は続き、さらに大きくなったと考えます。そのため、古墳時代前期末から中期初めにかけて、新潟県最大の古墳である古津八幡山古墳が造られ、そこに葬られた豪族が舟戸遺跡で暮らした可能性が高いことにつながったと言えます。

古墳時代後も、舟戸遺跡では人々が生活をしていましたが、古墳時代のような大きな集落などは今のところ見つっていないです。そこで、さらに舟戸遺跡の周辺から考えてみます。

【舟戸遺跡周辺の歴史】

後期旧石器時代（約 30,000 年以上前～） 日本列島では後期旧石器時代から人々が活動した痕跡が見つかっています。舟戸遺跡周辺でも草水町 2 丁目窯跡や古津八幡山遺跡、秋葉遺跡で後期旧石器時代に使われたと考えられる石器が見つかっています。これらの遺跡は全て丘の上にあることが共通点です。このことから、後期旧石器時代にはすでに舟戸遺跡周辺で、人々が丘の上という比較的高い場所で活動していたと考えられます。

縄文時代（約 13,000 年前～） 縄文時代は草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の大きく 6 つの時期に区分けされています。舟戸遺跡周辺では各時期で遺跡が見つかっています。特に中期から後期または晩期では、丘の上で原遺跡や平遺跡、秋葉遺跡などの大きな集落が営まれます。

縄文時代は丘の上に多くの遺跡がありますが、一方で平野の沖積地でも、中期の大野中遺跡や晩期の大沢谷内遺跡などが見つかっています。

弥生時代（約 2,500 年前～） 弥生時代は前期・中期・後期の大きく 3 つの時期に分かれます。舟戸遺跡周辺では今のところ前期の遺跡は見つかっていません。中期でも終わり頃になると、丘の麓で舟戸遺跡や塩辛遺跡が見つかっています。

後期になると、丘の上に古津八幡山遺跡が営まれます。一方で、丘の麓の遺跡も中期末から引き続き営まれており、平野と丘をつなぐ役割を担っていた可能性が考えられます。

古墳時代（3 世紀～） 古墳時代も前期・中期・後期の大きく 3 つの時期に分かれます。古墳時代になると、集落などはほとんどが平野で営まれるようになります。舟戸遺跡周辺では舟戸遺跡を始め弥生時代後期以前からあり、古墳時代前期でも継続している遺跡があります。

さらに、中期になると丘の上に古津八幡山古墳が築かれます。この古墳を築いた一大勢力が、丘の麓に集落を営んでいたと考えられています。その遺跡として、舟戸遺跡が今のところ有力視されています。そのすぐ近くには塩辛遺跡なども存在します。

これらの遺跡は、同じ扇状地にあり、弥生時代から古墳時代にかけて、同じ時期の土器が見つか

っています。そのため、これらの遺跡は当時 1 つの集落を営んでいた遺跡群として考えられます。

古墳時代後期になると、舟戸遺跡で土器が少なくなり、代わりに塩辛遺跡などで土器の量が増えます。そのため、古墳時代でも時期ごとで遺跡がある場所はもちろん同じ遺跡（集落）でも中心となる場所が移動していることが分かります。

飛鳥時代（7 世紀頃） 飛鳥・奈良・平安時代をまとめて古代と呼びます。飛鳥時代の遺跡は今のところ少ないです。丘の麓では塩辛遺跡第 1 次調査でカエリを持つ須恵器の杯蓋が見つかっています。そのため、弥生時代から続く古津の遺跡群では弥生時代中期から飛鳥時代へと継続して人々が暮らしていることが分かりました。

また、舟戸遺跡の周辺でも南西には大沢谷内遺跡や田上町の行屋崎遺跡が見つかっています。特に大沢谷内遺跡では、役所的な要素を持った遺物やお祭りに使った道具などが見つかっており、当時新津丘陵北部周辺が重要な地域だったことが分かります。

奈良・平安時代（8～11 世紀頃） 舟戸遺跡周辺でも奈良・平安時代の遺跡が多くあります。また、古津八幡山遺跡の周りには製鉄関連遺跡群が見つかっています。さらに、新津丘陵北部の北東側を中心に、土器の窯跡も多く見つかっています。この窯で焼かれた土器が周辺の地域に流通していました。このように、舟戸遺跡周辺では古代には製鉄や土器などの官営の生産工場とも言うべき遺跡が広がっており、重要な地域であったことが分かっています。

鎌倉～戦国時代（12～16 世紀頃） 鎌倉時代から



古津八幡山遺跡と新津丘陵北西部

戦国時代を中世と呼びます。舟戸遺跡周辺は中世では金津保と呼ばれる国衙（国の行政機関）の領域であったと考えられています。この金津保にあったと文献にある新津城については、新津城跡・程島館跡・東島城跡が候補地として挙げられます。

また、沖積地には古代から中世へと継続して認められる大沢谷内遺跡などの大きな集落があります。中世は古代までと異なり、土器だけでなく漆器も広く普及しますが、大沢谷内遺跡でも様々な木製品とともに漆器などが見つかっています。

江戸時代（17～19 世紀頃） 江戸時代は近世と呼ばれています。舟戸遺跡周辺である旧新津市域は、江戸時代になると新発田藩・沢海藩・村上藩の3つの藩の領域に分かれます。その後、沢海陣屋や満願寺陣屋などの江戸幕府が直接支配する領域に変わる地域もあり、複雑に変化していきます。

発掘調査では、多くの遺跡で近世陶磁器などの江戸時代の遺物が見つかります。そのため、江戸時代の人々が暮らしていた範囲は、今の私たちが生活している範囲とほとんど重なる範囲まで広がっていたと考えられます。

【舟戸遺跡周辺を解明する】

舟戸遺跡が弥生・古墳時代において重要な遺跡であることは、舟戸遺跡のこれまでの発掘調査などから確認できました。

また、同じ扇状地にある遺跡は弥生・古墳時代には1つの集落として考えられます。古代でも飛鳥時代の塩辛遺跡や奈良・平安時代の西島中谷内遺跡、さらに中世の東島大道下遺跡などが一連の遺跡として考えられる可能性があります。そのため、古代以降も周辺の遺跡一帯で見れば、ある程度の規模の集落が北へ中心を移動しながら続いていると考えられます。そして、今の私たちの生活につながっていくと考えます。

舟戸遺跡周辺は地理的にも重要な地域であるため、弥生・古墳時代において重要な遺跡がありました。古代以降も、飛鳥時代では大沢谷内遺跡などが律令制の役所の機能の一部を担っていたと考えられています。古代では製鉄や土器の窯跡などの官的な性格を持つと考えられる生産遺跡が展開します。中世も金津保という公領に含まれ、関連



古津八幡山遺跡と舟戸遺跡周辺の遺跡

すると考えられる城館などがあります。

このように、舟戸遺跡周辺は昔から重要な地域として注目され、人々が生活してきた地域であると言えます。

【おわりに】

本企画展では、積み重ねられてきた調査から見てきた舟戸遺跡の意義や地域の歴史について可能な限り触れました。皆様の興味や関心に応えることができましたら幸いです。これからも、地域の歴史が解明できるように努めていきたいと考えています。

お知らせ

文化財センター学芸員による展示解説

日時：2016年5月1日（日）13:30～15:30

会場：史跡古津八幡山 弥生の丘展示館 展示室

関連講座「舟戸遺跡と新津丘陵周辺の歴史」

日時：2016年5月29日（日）13:30～15:30

講師：相田泰臣・金田拓也（新潟市文化財センター）

会場：新潟市文化財センター研修室

定員：80名

史跡古津八幡山 弥生の丘展示館

新潟市秋葉区蒲ヶ沢 264 番地（花と遺跡のふるさと公園内）